

人が怖くてたまらなかったS・A君の作品

『にわとりむらのめんどりおじさん』の分析

井原成男*

I. はじめに

本論ではS・Aという名前をもつ26才の男性の作品を分析したいと思う。S・Aは“どうしても人になじめない。皆の中にもひとりぼっちであるような気がする”という訴えをもって筆者を訪れた。彼は『にわとりむらのめんどりおじさん』と題された作品を筆者にみせてくれた。それは原稿用紙23枚にびっしりと記された絵本であり、S・A自身の描いた挿絵が挿入されていた。筆者はS・Aの分析をひき受けた。分析の過程で明らかになったことは、その作品の中にS・Aのあらゆる心理的過程が表現されているということだった。後になって分析過程の中で明らかにされていった事柄がまさに、あらかじめこの作品の中に詰め込まれていたように思われるのである。

ところで、たまたま分析を受けたということだけで、本来それ自身として独立した存在である作品世界を分析的に解釈する権利を、果して我々はおもっているものであろうか？作品は文学的に解釈・評価すべきであり、分析的に解釈してはならないのではないか？それは文学作品の作品としての価値を減じてしまうのではないか？残念ながらその通りであると筆者は思う。

フロイト⁽¹⁾は『ドフトエフスキーと父親殺し』の中で次のように言い切った。

……ただ残念なことに、詩人という問題を前にしては精神分析は手も足もでないのである。……

またフロイト⁽²⁾は『レオナルド・ダ・ビンチの幼児期のある思い出』の中で正当にも次のように断じている。

……芸術的業績の本質もまた精神分析的にはうかがい知れないものであることを認めなければならない。……

ところで同じ箇所でもフロイトは次のようにつけ加えることも忘れてはいない。

……われわれの目標は依然として、欲動活動の道をへて行なわれるところのある人間の外的諸体験とそれへの諸反応とのあいだに存する関連の指摘である。なるほど精神分析学はレオナルドの芸術家的本質という事実を解き明かさないとはいえず、しかし芸術家本質のもろもろの発現と制約とを明らかにすることはできるのである。(傍点引用者)……

もの事をそれ以上にもそれ以下にも見ていないという点で、この3つの引用部分に、我々は、分析的芸術論を云々する場合たえず立ち帰るべきであろう。

このように、精神分析学は作品の内在的価値を明らかにするのではなく、それをかいた人間の本質をなしているある側面を明らかにするものであることはフロイト自身が認めているところである。この意味で、フロイトの方法は文学論（作品論）ではなく作家論である。しかし、この方法の積極面として我々は、文学論を作品論という狭い枠内に閉じ込めるといふ視野狭窄を脱却しているということをお認めしなければならないだろう。

だが、このような積極面を認めてもなお、我々としては分析的な作品解釈を文学論に置き換えることはできない相談であることを率直に認めておきたい。

本論で目指した事は次の3点である。(1)たまたま分析を受けた人が示してくれた作品がその人の心理的過程をどれぐらい反映しているものなのかの解明、(2)作家であるという目的意識をもちに即自的・衝動的にかかれた作品になぜ無意識が反映され易いのか？(3)無意識的にかかれた作品

* 所属：早稲田大学（長野大学産業社会学部）

が目的意識的にかかれるようになる（つまり、表出から表現へ作品を高める）というのはどんなことなのか？この3点の解明を最終的には目指したいと思う。(1)は従来の分析的作品論を踏襲するものである。しかし、(2)(3)はこれまでの分析的文学論の枠をこえたものであり、作品を表現するというとはどういうことかの解明を目指している。筆者は、目的意識的な作品は単に衝動的にかかれたものではなく、断えず無意識を意識化していくものであるという主張をもっているが、S・Aの、即自的にかかれた作品のもつ文学的にみた限界について、この点からの解明も試みるつもりである。

ところで佐藤⁽³⁾は分析を「無意識への挑戦」としてとらえ、また、『生活の中の精神分析』⁽⁴⁾の中で、「精神分析療法は暗示や説得療法とは根本的に異なり、あくまで患者自身の主体性を重んじ、患者自身が「アッ！そうだったのか」と心からわかることを助け、患者と協同して自我の歪みを取り去り、より健康な自我活動を行なえるようにすることである」とのべて、自我の主体的側面を強調している。筆者が思うにこれは、自我が無意識に挑戦し、それを意識化していくということであろうが、この意見をバック・ボーンにして、先にのべた(2)(3)の問いかけを解明したいという心づもりを筆者はもっている。この点から、S・Aの作品のもつ限界を示すことに成功したならば、本論は従来の分析的解釈をのりこえていくことができるかもしれない。

(なお文中太字で示した用語について、文末に一括して用語解説をつけた。)

II. 症例

主訴と家族構成：S・Aは26才の独身男性。冒頭にのべたように“どうしても人になじめない。皆の中にいてもひとりぼっちであるような気がする”ということを主訴としている。父・母ともに健在であり、本人は5人兄弟の4番目である。姉2人、兄1人、妹1人という家族構成である。父は商業を営んでおり、1年間に正月3日しか休む事がないという程の働きもの。律気で、怒った事がなく、皆から「仏様のような人だ」といわれている。ところが若い頃は結構怒り勝ちだったのだ

という。子煩悩である。この子煩悩にはこの父親なりの理由があった。父親の父（つまりS・Aの祖父）はその妻が武家の出であり気位が高かったため、ほとんど家によりつかず他所に女をつくっていた。父親は幼い頃（小学校）から他の3人の兄弟のために4里の道のりを歩いて銭をもらいに行っていた。そのため、自分の子どもたちには決してこのような思いをさせたくないと思っていたということであった。その結果としての子煩悩だった。これに反して、母親は漁師の娘（長女）で、勝気で気位も高かった。地方の潰れそうな程小さい漁村の実力者の娘であったが、その父がお人好であったために、借金の負債を背負わされるハメになり、落ちぶれて奉公にでた。その奉公先でS・Aの父と知り合い結婚したのであった。

S・Aの父母の結婚にはもうひとつの側面があった。母には弟が1人、妹が1人あった。母はこの2人の弟妹に加えて、自らの父母の面倒も父に見てもらうことを申し出た。父はこれも心よく引受けた。ところで、この弟は落ちぶれた母の家を建て直す志半ばにして戦死してしまった。母方の妹は躁うつ病であり、若い頃できた一人娘をかかえていた。このような複雑な家族をS・Aの父は全て引受けなければならなかったわけである。

ところで、母方の祖母はまた気位が高く、勝ち気な女性で、S・Aの祖父と別居していた。このような様々の事情を背景にしたS・Aの幼なかつた頃の同居家族を Fig. 1 に示した。

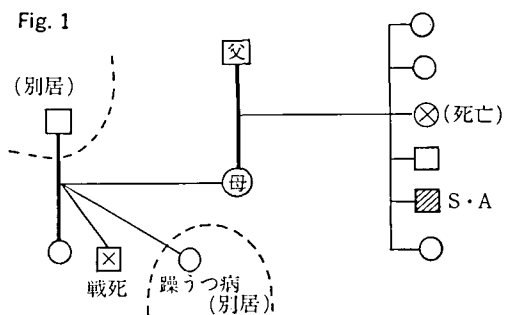


Fig. 1 から分かるようにS・Aの幼い頃には母方の祖母が同居していた。S・Aの父はこの祖母をも実の母のようによく面倒をみていたという。S・Aが大学3年の時この祖母が死亡した。この時S・Aの母は65才になっていたが、棺に取り縋って泣き

じゃくる姿はまるで幼女のようにであったという。

家族歴から、S・Aを取り巻く状況を見るとひとつの輪廻のような連続のあることに気づく。それは、大人しく、お人好しの父と、気位が高く勝気な母という繰り返しともいえる父・母（男一女）の結びつきである。S・Aの父方の祖父・祖母も、母方の祖父・祖母もそしてS・Aの父・母の結びつきも全てこのようなパターンをもっていることに気づかれると思う。

生育歴：S・Aが母からきいたところでは、出産時の状況はおおむね正常であったという。ただ、産後の期間が長く、そのためか独り歩きができるようになったのは1才半になった頃であった。家は商売をしていたが、いつもお座りの姿勢で街ゆく人を眺めていたという。母の話ではほとんど泣かない子であり、母の言う事もよくきいていた。尻のしまつに関して、S・Aは母が拭いても、もっときつく綺麗に拭いてくれという程の几帳面さをもっていた。S・Aは分析中にトイレの事を思い出し、「うちの便所は深く蛆が湧いていた。便所というのはとても暗く嫌なところだった。母がぼくに對してお尻の糞がどうだったかはもう憶えていない」と語った。S・Aはその後、祖母の空乳を吸って、息がつまり窒息死しかけた事があるという。母も父の商売を手伝わざるをえなかったため、S・Aは祖母と遊ぶ事も多かった。加えて、母が外出を嫌うタイプの人であったために、いつも外出に誘ってくれるのはこの祖母であった。祖母は浄土真宗を信仰しており、S・Aをお寺によく連れていった。この頃きいた無常観がS・Aの心情的なレベルでの思想の核をつくっているとのことだった。

この頃のS・Aの遊びは女の子的なものが多かった。夕方になってS・Aの姿が見つからないので家中の人があらゆる場所を探しまわっても見つからないという事件が起こった。皆が探し疲れて、ふと押入れを開けてみると、その中にS・Aは雛祭りの人形を飾って寝入っていたという。押入れの中にはS・Aのもっとも安心できる場所であったという。この押入れのテーマは後に繰り返し現れてくるように、S・Aの心理構造の重要な部分を占めている。S・Aは他人に決して見せない押入れの部分をたえず持ち続けていた。それ故にこの部分に侵

入してくる他者は、それが悪意に発したものであれ、善意に発したものであれ、等しく、S・Aのたったひとつの逃げ場である押入れへの侵入者として脅威を感じさせたのである。

さてこのあとで、S・Aの帽子事件が起こる。S・Aの母はとても感情的で厳しい人であった。S・A自身のコトバを借りれば「それは恐ろしくて身震いするようなヒト」だったという。正月3日の数少ない父の休日に、S・Aは兄と連れだって、サーカスを見に連れていってもらった。ところが運悪く、帽子をなくしてしまったのである。母に叱られないように父は同じ帽子を買って与えた。このことは母に決して言うてはいけないと口止めされた。ところが、景品にもらった風船から足がついた。兄はすぐに泥を吐いてしまったが、S・Aは決して口を割らなかつたという。周囲の人はそのあまりのかたくなさに大笑いであった。このことはS・Aの持つ極度の“かたくなさ”を理解する上に重要なエピソードであると思われる。大人から言われた事を忠実に守り続け、現実的にはもうその必要がなくなった後までもかたくなにその命令に従うというS・Aの態度の最初の現れがここに認められる。

ところで、この怖い母について、S・Aはあるエピソードを思い出してくれた。それは何かの事でS・Aが悪い事をしたにも拘らず、謝らずに逃げた時の事である。S・Aは裏の炭俵に隠れ潜んでいたが、母はじわりとS・Aをその俵からつまみ出し、柱に縛りつけたという。

その後、S・Aは母の言うことに過度に従いがい、母の顔色を窺って行動するような面がでてきた。少し叱られるとS・Aは「お手伝いしましょう」といって母の気嫌を取っていたとにがにがしげに語ってくれた。しかし、その従順さは母の機嫌を窺う瞬間だけの束の間のものであり、その場さえ太鼓持ち風に通り抜けてしまえば、もうお手伝いなどしなかつた。

幼稚園への入園はS・Aにとってショッキングな出来事だった。それまで押入れの中ばかりで暮らしていたS・Aにとって、外の世界はあまりにも眩し過ぎたのである。S・Aの父はS・Aを自転車の荷台に乗せて幼稚園まで送ってくれた。S・Aは父を園の友だちに見せるのを嫌がった。この頃父には「療

癢”があり、皆からコブおじさんと呼ばれていたからである。しかし、幼稚園のすぐ近くまでは送ってもらっていた。時にはS・Aの兄が小学校への登校の途中、S・Aを幼稚園に送ってくれる事があった。S・Aは兄が自分を幼稚園に置き去りにしていく後姿を見送り、寂しかったが、一人でいるのは嫌だ！とは決して口に出せなかったという。S・Aは幼稚園の裏で一人で遊んでいる事が多く、時々先生に表の庭に連れだされた。

S・Aは幼稚園がひけると近くの小学校に兄を迎えに立ち寄ったが、その日たまたま兄の帰りが遅く、相撲場で待っているうちに日射病に罹ってしまった。その後、症状が悪化し、髄膜炎を疑われてしまい、その夏中寝ていなければならなかった。夏の暑い中、高熱にうなされながら、外で遊んでいる子どもたちの楽しそうな声をききながら、「世界はなんと自分から遠くにあることだろう」と絶望的な気持ちになったとS・Aは回想した。

この頃、S・Aは夢を見たという。それは、ポオの『穴』という小説にあるような、閉じ込められてしまったら二度と外に出られぬ鉄の壁の中に閉じ込められたというものだった。うなされて、もう二度と生き返れない！と思った瞬間目が覚めると、そこにS・Aを看病してくれている優しい母の姿があった。このように、絶望的な程の苦しさを体験した後に母の優しさをえることができる（逆にいうと、そのような苦しみを経なければ母に愛されない）という思いがS・Aの中には根強く残ってしまったようである。

S・Aの兄はこの事件に関して深く傷ついた。彼はS・Aが病気になったのは自分のせいだと思った。自分がもう少し早くS・Aを迎えにいってればS・Aは病気にならなかったという思いである。これはS・Aにとって、兄弟間の葛藤をたくみに経験しないまま通過させてしまうという結果をひきおこした。S・Aとこの兄は4才違いであり、また、この兄はかなりの優等生であった。この兄の自責の念は、S・Aの側からいえば、S・Aの中に兄弟間の葛藤にもとづく劣等感コンプレックスを生じさせないという副産物をもたらしたのである。その結果、S・Aはこの兄ととても仲が良かったという。他の子がS・Aの事を「馬鹿」という兄は烈火のごとく怒りS・Aを守った。

S・Aには2人の姉がいる。上の姉はS・Aと年が13才近く離れている。そのため、S・Aに物心がついた頃、この姉は既に大人になっていた。S・Aにとっては母が2人いたようなものであったという。この姉は母と性格が似通っており、また一家のgod sisterとして母の全幅の信頼をえていた。S・Aにとって理想ともいべき次姉はS・Aと6才離れていた。この姉は後に「わたしはあんたを背負って育てたから背が伸びなかった」と冗談にのべたという。S・Aはこの次姉のコトバに涙が流れそうになり心から感謝したという。この次姉にたいしてS・Aはいつも“優しさ”と自分の理想像を感じていたという。この姉も母と同様に勝気であった。

S・Aはその後、小学校に入り、病気のショックのためか、しばらくは知恵遅れを疑がわれた。また、この前年妹が生まれたため、母の愛情が妹に移ったと感じた。この頃S・Aはちょっとした傷害事件をおこす。S・Aの事をいつも馬鹿にしていた少年をナイフで切りつけてしまった。この時S・Aはかつて節穴から覗いてみた、母親が祖父からナタで叩かれヒイヒイ泣いているあの光景を思いだした。S・Aは自分があんなにも恐れた場面を自らが起こしてしまったという巡りあわせにしばらく意識を失った。父が呼びだされる。もともと越境入学をしていたため転校を勧められた。優等生の兄に免じて、なんとか転校はまぬがれた。この傷害事件以降、S・Aは自らの怒りを抑圧した。まわりの人が、すべて、「お前なんか刑務所送りだ！」といているように思えたという。S・Aは越境して通学していたため、家の近所には友人がいなかった。また、S・Aの生まれた九州のS県は特に排他的であり、よそものであるS・Aの父もこの風土に解け込むのに苦労したが、結局とけこめぬ面も残った。このように、S・Aのおかれた“ふるさと”はいつも、なにかなじめぬ異郷であった。

S・Aはこの傷害事件のあと、緘黙傾向を強めていった。また友人も極端にへった。S・Aは小4の頃まで、学校の裏の崖を登ったところに咲いていた赤いバラの花がたまらなく恐ろしかったという。恐らく、S・Aはこのバラの中に自らの敵意を投影し、自らの姿を見ていたのではないかと思われる。

S・Aはこの頃、憧れの女の子がいた。その子とS・Aは連れだって登校していた。しかし、その女の子は、S・Aと違い、優等生で活発な子であった。体育の特に不得手なS・Aは、なわとびの仕方などこの女の子に習っていたという。ここでもまた、女の子はS・Aにとっての理想像であり、またS・Aがどんなに努力してもそのようにはなれぬアンビバレンツな存在として立ち現れているように思われる。

小6になり、S・Aにひとつの転機が訪れた。Iという新任の教師が、S・Aの作文に目をつけたのである。この教師はS・Aに日記をつけさせ、それを皆の前で読んできかせてS・Aの自信を高めてくれたという。作文によって認められた。恐らくこのあたりにS・Aの文学への志向の切っ掛けがあるのではないかと考えられる。

S・Aにこの教師は草野心平の「ホッまぶしいね！ホッ うれしいね！」ではじまる詩を朗読させたというが、まさに象徴的である。S・Aはこの詩句のごとく、眩しい世界に帰還したのであった。

その後S・Aは中学を経て、S県の名門高校に入り、T県の私立大学の法文学部に入学した。現在この大学の大学院で児童文学を専攻している。

III. 作品紹介

次に、S・Aのかいた『にわとりむらのめんどりおじさん』と題された作品をそのまま原資料として紹介しておきたい。筆者は、作品には一切手を入れなかった。また、挿入された挿絵もそのままに示しておいた。挿絵の下にFig. 2～Fig. 25の記号が入れているが、これはもともとの作品にはなかったものである。これは印刷の便宜上、筆者がS・Aの承認をえてつけ足したものである。その他の面についてはいっさい手をつけなかった。

☆

—ほっ ほっ ほっ！

けづめをおったてて、きょうも村の中に駆けこんできたのはだれあろうめんどりおじさんです。

<めんどりおじさんなんておかしいよ！おんどりおじさんのまちがいだろ>

まあ きみ、そんなにめくじらを立てないでく

れたまえ。それはりくつですよ。りくつ。まちがいなんかじゃありません！

<はは、まちがったんでてれくさいんでしょ>

ぼくはチョウネクタイをしめてから、きちんとしせいをただし、お話のつづきをはじめることになりました。

—ほっ ほっ ほっ。

とにかくこんな風におじさんはやってきたんです。

このおじさんが朝からこんなにあわててるときはロクな事がないんだけど。

—おい！めんどりの！こんなに朝早くどうしたんだい。

—ほっ ほっ ほっ。

いい話 いい話。

—いい話ってどんな話だい。

—生まれたんだよ。ついに。ああ、ぼくはこの日をどんなにまっていた事か。空にオリオンがピカッと光って、生まれたんですよ。タマゴが。

—タマゴがってお前さんまだ一人もんじゃないか？

—ええ、そうだと。

—それじゃ おかしいな、生まれるわけないよ。

—ぼくに生まれたんですよ。

—ええ！おじさんに！

ぼくはびっくりしました。村の人たちも同じでした。こんな話ってあるかしら。

いぬがねこを生んだ

これは国語のテストじゃないんです。いぬがねこのこを生んだなんてへんな話。でもこれはね！いぬがね！こをうんだってよむんだよ。

どんなに変な話でもナゾがとけてしまえばなんでもありません。

それじゃ、このめんどりおじさんのタマゴ事件はどうなんだろう。

そいつを確かめるために もう少し話をつづけましょう。

めんどりおじさんは、ここ1週間程前から、自分もひとつ タマゴをうんでみようと考えた。その気になればなんでもできる、なんて。馬鹿な事を考えたもんだ。

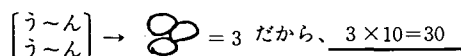
おじさんはさっそく、卵を生むめんどりを観察にでかけた。

Fig. 2



こんな風にめんどりたちはがんばってタマゴを生んでました。(Fig. 2)

Fig. 3



こんなめんどりが10羽いると30コもうまれるんです。(Fig. 3)

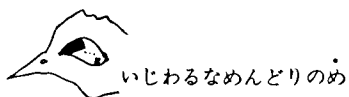
めんどりおじさんは1という番号のついためんどりにたずねました。上の絵にかいてある(Fig. 2)めんどりです。

—あんだ いいね たまごが生めて。

No.1のめんどりはうさんくさそうにおじさんを見ました。それもそうです。めんどりたちにとっては、たまごを生むのはしごとですから。しごと中に邪魔されるのはあまりいい気持ちはしなかったのかもしれない。ちょっと心のせまいとりたちですね。

きっとこんなめをしてたんでしょ。(Fig. 4)

Fig.4



—いいことなんかありませんよ！

みんな タマゴのまままで食べられちゃうんですもの！

—え、きみら、タマゴを食べるの？

無知な(=なにも知らない)めんどりおじさんはびっくりしました。

—ちがいますよ。人間が食べるんですよ。

—えっ。にんげんて。

—おじさん、にんげんをしらないの？

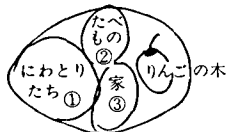
そうです。めんどりおじさんは、にわとり村の

人ですから、にんげんなんて知りませんでした。おじさんの頭の中を少しのぞいてみましょう。

(Fig. 5)

Fig. 5

にんげんをしる前のめんどりおじさんの頭



おじさんの頭の中には、①にわとりたち②たべもの(こくもつがおもです)③家(わらでつくったもの)しか入っていませんでした。その他に、番号のついてない"りんごの木"っていうのがすみっこに入っていますが、これはめんどりおじさんの大切な思い出なのです。(めんどりおじさんは、りんごの木の下で生まれたので りんごにはとくべつなあいじょうを感じていたのです)

(もしきみが、クレヨンを持っているならこのリンゴを色でぬりつぶして下さい。リンゴはアカだなんて いわずに、青でぬりつぶしてくれるとうれしいな)

だれだい、いぬのあしは5本なんていってるのは？

—どうすれば、それみられるの？

—ここにまっていれば来ますよ。

めんどりおじさんは、じっと待っていました。にんげんがくるまで。にんげんがみたくてね。

さて人間がやってきましたが、こんな人でした。

(Fig. 6)

Fig. 6



これはもちろん、めんどりおじさんの目にうつった人間です。(なんだかへんな生きものですね)

にんげんは、いっしんにタマゴの数を数えていました。

1・2・3・・・30。

タマゴはしっかりと30個ありました。

<これは 上でき 上でき>

そういって にんげんは めんどりたちの頭をなぞました。

—おや！こいつはどうだ。

にんげんはやっと、めんどりおじさんが目につきました。

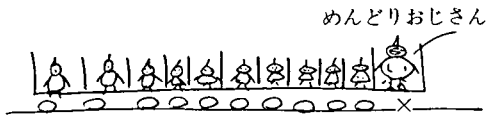
— 一匹にげだしたか？

けれど めんどりはきちんと10羽いました。

—まあ、おおいにこした事はない。

にんげんはそういうと、めんどりおじさんをつかまえ、カゴのあいたところに入れました。そこでめんどり小屋は次のようになりました。(Fig. 7)

Fig. 7



にんげんは、毎日、めんどり小屋をみにきましたが、めんどりおじさんのとこだけはタマゴがいっこともありません。

—はたらきがないのいとりだ！

そういつて、にんげんはめんどりおじさんの頭をこづきました。

—あしたまた、タマゴを生まないならしめ殺してしまおう。

さあたいへんです。

めんどりおじさんは、なんとかタマゴを生もうと必死です。はじめは、ひやかし半分だったけど、こんどは命がけです。

めんどりおじさんがタマゴを生もうとがんばっているようすは、たいへんまじめなものでした。

Fig. 8

(Fig. 8, Fig. 9)

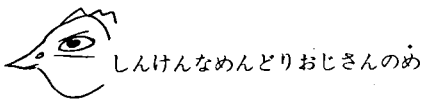


Fig. 9

$$\begin{bmatrix} \text{うーん} \\ \text{うーん} \\ \text{うーん} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \text{うーん} \\ \text{うーん} \\ \text{うーん} \end{bmatrix} \rightarrow 0$$

けれど、どんなにりきんでも、タマゴはひとつもでてきません。

なまけものめんどりおじさん、こんなにがんばったのは生まれてはじめてでしたが、そのかいもなく、何日たってもタマゴはうまれません。

しんけんなめんどりおじさんのめからはなみだ

さえ流れました。(Fig. 10)

Fig. 10



それを見て、にんげんも

めんどりおじさんがかわいそうになってきました。他のめんどりたちも、めんどりおじさんがかわいそうになってきました。けれど、なみだじゃタマゴはつくれません。

にんげんも めんどりたちも、それにとのおじさんも加えて、みんなで

—なんとかならないかしら？

なんとかしたいものだねえ！

とないちえをしぼって考えました。それ程めんどりおじさんのなみだは、みんなの心をうったのでした。

でも へんですね。

もう、しめころすといったにんげんまでがどうしようしてくれたのだから、しめ殺されることもないし、卵を生まなくてもよいわけです。

だから、ここでお話はおわりなのですが、こんどは めんどりおじさんがきき入れません。

—ぼ ぼく なんとかして卵を生みたい!!

これはこまったことになりました。というのも、めんどりおじさんが人間にあった後の頭の中をみて下さい。(Fig. 11)

Fig. 11



おじさんの頭の中からは、仲間のことも、たべもののことも、家のこともなくなり、ただくたまごを生みたいという気持ちとにんげんのことだけでいっぱいです。にんげんはアクマの顔をしています。おじさんはよっぽどにんげんがにくらしかつたんでしょう。

にんげんはもう、そんな事忘れて、おじさんに同情さえしてくれたのですが、めんどりおじさんはそうはいきません。

これにはみんながこまってしまいました。

これはまったく大問題です。

<にんげんがアクマだなんて>そんな事を考えている人が、この世の中にいるなんて許せないことです。

にんげんは涙を流し、(Fig. 12)

Fig. 12

①自分が悪かったこと、 ②もう、ニワトリたちに、タマゴをうませたりしないこと、 ③タマゴを食べないこと
12月1日 にんげん ㊄

という証文までつくったのです。

また、めんどりたちは、めんどりおじさんの代りにいつでもいくつでもタマゴを生んであげてことをかたく約束したのです。

めんどりおじさんまでもうれしくて泣いてしまいました。そして どうとしても、こんなバカな考えをやめてしまいたいとかんがえました。

けれども だめ!

いくら考えても、めんどりおじさんの頭から、<たまごを生みたい>という考えが消えないのです。

「できごとは はじまった。もはやそれは消えることはない。

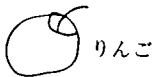
すみやかに野にいでよ!

そして つくりかえん!

ところで、この本の中にあった絵をよくみてきたきみなら、めんどりおじさんの頭の中にりんごの木があったのを覚えてますね。多少、小さくなってしまったけど、人間にあったのちのおじさんの頭の中にもりんごはのこっていました。

こここのところだけ大うつしで書きだしてみましょう。(Fig. 13)

Fig. 13

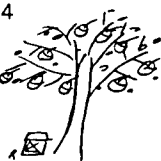


とってもすてきなりんごですね。きみはちゃんと青にぬってくれたかな。

でも、これだけじゃものたりないな!りんごの木をつけてみましょう。

(Fig. 14)

Fig. 14



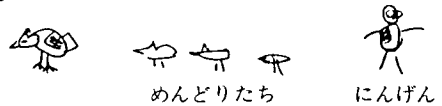
下にあるのは、めんどりおじさんの生まれた家ですよ!横に小さな点があるのがめんどりおじさんの小さい時。

みんなは、こここのところに目をつけました。にんげんも、めんどりも、そしてめんどりおじさんまでもが、いっせいに、青いりんごの木めがけてかけはじめました。

『しっ、しずかに!きみの傍を葬列がとおりすぎていく。静かにひざまづき、野辺送りの歌をうたいはじめよ』(『ロートレアモン』)

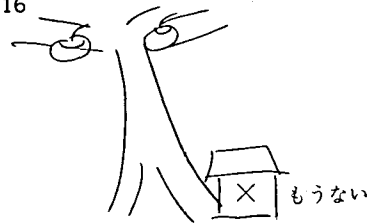
みんな、森をぬけ、野原にでました。風がひゅつと吹くと、みんなの汗をすいとってくれました。むこうに青いりんごの木がみえました。めんどりおじさんを先頭にして(Fig. 15)

Fig. 15



の順にりんごの木のところまで行きました。なつかしいあのりんごの木でした。(Fig. 16)

Fig. 16



むかしのままにりんごは青々としげっていました。けれど、もう、おじさんの家はありません。

しかたがないので、みんなりんごの木の枝にこしかけました。(Fig. 17)

Fig. 17



そして、めんどりおじさんも、だいすきな家に帰ってきたんだから、きっとかなしい思いでも忘れて<たまごを生みたい>なんて馬鹿な考えはすてくれるでしょう。

みんな口ぐちに“もうすっかりこれでよかったんだ”とつぶやき、めいめい、かってな夢をみてねむりこんでしまったのです。

<オヤスミナサイ> <心をこめて>
次の朝。

びっくりすることがおこりました。めんどりおじさんがいないのです。みんなびっくりして、さがしまわりました。けれど、めんどりおじさんはいません。みんながねむっている間に、空の星になってしまったんでしょうか？いいえ、早まってそんな事かんがえてはいけません。

みんなが、りんごの木の上の方をみあげると、いましたよ。そこに、めんどりおじさんが、きちんとね。

しかも、みて下さい。

あんなに、たのしそうな顔して。

<ほ、ほくはついに、タマゴを生んだ>

えっ。今なんていったの。

みんなびっくりしました。確かに、めんどりおじさんは、タマゴを生んだっていいましたね。

でも、そんなことが！

ちょっとみてみましょう。(Fig. 18)

Fig. 18



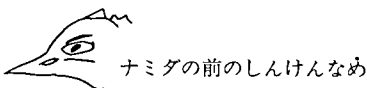
たしかに、めんどりおじさんの腹の下から丸いものが姿をみせています。でもよく見ると、ええ、それはリンゴでした。

みんないいます。

— めんどりおじさん。それはリンゴです。

けれど、いおうとして、みんな口をつぐんでしまいました。おじさんの しんけんな目がみえたからです。(Fig. 19)

Fig. 19



(このあとは きっと ナミダですよ)

そんなわけでみんな意味もなくだまりこくってしまいました。

さて、わがめんどりおじさんは、りんごをひとつつかえると“にわとり村”にかけて帰りました。そこで今日の朝の話になるのです。

—うまれたんですよ。ほくに、タマゴが。

村のみんなは目を丸々にしてめんどりおじさん

を見ました。おじさんのうしろには、にんげんと、めんどりたちがしょんぼりと立っていました。

—ああ、なんてこった。リンゴをタマゴとは。

—ひとつみせてください。

と村のみんながいいました。

おじさんは、いきようようと タマゴをふところからだしてみせました。

<ぼくはタマゴが生みたかった。なんとしてもね>(Fig. 20)

Fig. 20



—ウワッハッペッ。

わらいが、うづのようになっておじさんのまわりをとりかこみました。

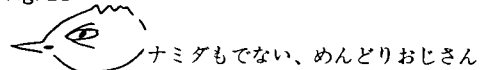
さて、いかなることにあいなるやら。

—わっはっはっ、これがタマゴだよ！

なんと、リンゴがタマゴとはついに気がふれたか？

めんどりおじさんのガッカリした事といったらありませんでした。みんななぐさめようもありません。次の図(Fig. 21)にどうして、ナミダがかいてないかという、おじさんはナミダもでない程に悲しかったのですよ。

Fig. 21



みんな ふたたびリンゴの木に帰ります。みんな じぶんの事のように悲しかった。<どうしておじさんはタマゴが生めないんだらう><おじさんはタマゴが必要なのに><タマゴなんか必要でないあたしたちにどんでんできて><どうしておじさんにできないんだらう>

みんな しんそこ

かなしかった。

<きみも、そこでのんきにリンゴなんかかじってないで、本の中に入っておいでよ。おんどりおじさんでしょなんてケチばかりつけてないでさ>

<こんどはぼくがこの本を読んでいる少年にや

り返す番だった>

すると、この本を読んでいた少年はまっぴらしたと本の中に入ってきて、リンゴの木のそばに立っていました。

— ぼくもどうしていいか分からないよ。

と少年はこたえました。

— だけど、これだけははっきりしてるよ。めんどりおじさんはリンゴから生まれたわけじゃないんだろ。

— この大切な時に変な話をしないでくれ。

— でも、これは大切な事だと思うよ。めんどりおじさんはもともとリンゴの子じゃないんだもの!

ぼくは、このりんごに青い色をぬったからしてるんだ。りんごはアカだけじゃないもの。とくに小さい頃はそうさ。

リンゴはおじさんのなつかしいものだったんだ。

— きみらは、おじさんに約束したんだろう。もうタマゴをたべないって。いつでもうんであげるって。

きみらはおじさんがかわいそうでついてきたんだろう。

きみらはおじさんといっしょにかなしかったんじゃないの?

— うん。

とみんなはこたえました。

— そうでした。みんなめんどりおじさんといっしょにこんなになかったし、ついでにこんなにはずかしかったんです。

— それじゃ、きみたちがしなきゃならないことはたったひとつさ。ぼくはそのことずっと考えていたのさ。

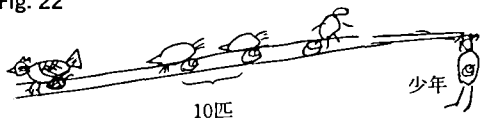
— じゃあ、ついでに君もそうしてね。

— そういうと10羽のめんどりと、人間と、このへんな少年は、りんごの木にかけのぼりました。

もちろん、めんどりおじさんは、まっ先にりんごの木にとまっていた。

みんなのやった事といったらこんなことでした。(Fig. 22)

Fig. 22



みんな、りんごを、おなかの下においてすわりました。

少年はすわるところがないので、枝に必死にぶらさがり、リンゴをおなかにくっつけました。

そして、みんながいっせいにさげんださまはおかしなものでした。

タマゴを生みたい

ククラツラルド

タマゴを生みたい

ククラツラルド

めんどりおじさん

ククラツラルド(Fig. 23)

Fig. 23



これにはさしものめんどりおじさんもわらってしまいました。

そして、みんなに向っていいました。

— さみしいね。でも

ぼくは さいしょから分かってたんだ。

きっと。

これがタマゴじゃなくてリンゴだってこと。

でもあったかなリンゴだってね!(Fig. 24)

Fig. 24



これは、みんながあつたためたために、ゆげのでているりんごです。

<ユデタマゴじゃなくて ゆでりんご>

これなら きみにだつてつくれるかもしれないよ。

めんどりおじさんのタマゴなんかじゃなくてさ。

さて、いねむりしているめんどりおじさんの頭

の中をのぞいてみたらこんな風になっていました。(Fig. 25)

Fig. 25



とってもすてきなりんごの木ですね。

☆

IV. 作品の要約と問題提起

本来作品はそれ自体として享受すべきものであり、それを要約するということは邪道である。とはいえ、S・Aの作品は作品と呼べる程完成されたものではなく、その筋を辿ること自体むづかしい。それ故に、作品を簡単に要約し、その中からいくつかの要素をひろいあげてみたいと思う。

にわとり村に生まれためんどりおじさんは男であるにも拘らず“たまごを生みたい”という強迫観念に囚われてしまう。めんどりおじさんにはもとからこんな強迫観念があった訳ではない。しかし、管理者である人間に女と間違われ、卵を生まなければ殺してしまうとまで脅されてしまった。この脅威は現実的なものであり、おじさんが殺されまいと必死に管理者(=超自我)の意に沿おうとするのは当然のこととして現実的の反応である。

(管理者(=超自我)に反抗する道も可能な選択であったかもしれないが、おじさんはこの道を選ばなかった。)ここまでは現実的の反応であった。しかし、この脅威が去った後にも、おじさんの恐怖は超自我として内面化されてしまった。そのことにめんどりおじさんは気づかない。そして、この“たまごを生まなければならぬ”という外界からの脅威は、まるでめんどりおじさんの内面的欲求であったかのように、“たまごを生みたい”という形に置き代えられてしまうのである。いわば、めんどりおじさんは、自らの真の欲求でなかったものが、あたかも自らが本来願っているものであったかのような錯覚に陥っていくことになる。(1)

ところで、このめんどりおじさんに、周囲の人は同情してなんとか助けてやりたいと思うようになる。逆説的ないい方になるが、この同情はめん

どりおじさんが強迫観念をもたなかったら生じなかったものである。つまり、めんどりおじさんは同情をひくような可愛そうなおじさんであるが故に同情を惹くことに成功していると言えるだろう。これがめんどりおじさんの疾病利得であることは明白であろう。めんどりおじさんが“たまごを生もう”と駆けまわる様は、我々の目から見れば悲しい程に滑稽である。この必死さの可笑しさによって、めんどりおじさんは皆に愛されたわけである。少くともめんどりおじさんは無意識にはそう希っていた。めんどりおじさんがもがけばもがくほど、めんどりおじさんは愛されるのである。(2)

ところが、ここに思いがけぬことが起こった。人間(=管理者=超自我)が悪魔になってしまったのである。ここに、めんどりおじさんの“他者は皆信頼できぬ悪魔である”というニヒリズムが生まれる。しかし、他者が皆悪魔であるという観念は社会に受け入れられぬものである。めんどりおじさんはこのニヒリズムを完全には抑圧できないままに、しかし、それをなんとか解決すべく走り回らされることになる。(3)

このめんどりおじさんの内面を人々はどのようにして知ったのであろうか？それは、頭の中が知性的に分類・整理されているというまことに奇妙な方法によってであった。これは分析でいう、いわゆる知性化と考えてよいと思われる。めんどりおじさんは、いわばこの知性的な方法を媒介してのみ自らをしり、また他者に自らをしらせることができたのである。(4)

ところで、この強迫観念の治療法としてとられた方法はまことに興味深い。それは、めんどりおじさんのなつかしいもの、りんごの木のところに戻っていくこと(退行すること)なのである。この“りんご”はフロイト⁽⁵⁾によれば、母の乳房の象徴であることが知られている。ところが、帰るべき家は既になかった。もはや象徴としてのりんごの木しかそこには残っていなかったのである。退行による自己治療は不成功に終わった。(5)

そこで、次にめんどりおじさんが選んだ方法は、この象徴的な世界である“りんごの木”の中で自己の願望を実現していくことであった。これより先、めんどりおじさんの取る方法は極めてファン

タスティックで非現実的なものになっていく。めんどりおじさんは、なんとリングを卵と思い込んでしまうのである。これは現実検討能力の低下であり、妄想の発生でもある。ただし、後に分かるように、めんどりおじさんはこの“たまご”が実はリングであることを心得ていたのである。現実には完全には否認されてはいない。めんどりおじさんは、自分が“りんご”を“タマゴ”と思い込もうとしているということは、きちんと弁えているのである。ファンタジイをファンタジイと自覚していること、これ故にめんどりおじさんは発狂することを免がれている。(6)

しかし、このようなファンタスティックな解決法が人々に受け入れられる事はなかった。村の人々は、めんどりおじさんの妄想を笑い殺すのである。この時点でめんどりおじさんが被害妄想に陥らなかったのは、彼がきちんと、自らの非現実性を自覚していたことと、もうひとつは、めんどりおじさんに付き添ってくれためんどり(たち)がいたということにあるだろう。ここで女性は、めんどりおじさんを救うものとして現れている。めんどりおじさんに、“仕事の邪魔をしなさい!”と拒否したのも女性であれば、めんどりおじさんを救うのも女性であるというこの事実はまことに興味深い。めんどりおじさんにとって女性は、拒否するものと受け入れるものという2面性を烈しくその内に取り込んだアンビバレンツな存在としてあるのだと思われるからである。(7)

非現実的になっためんどりおじさんはしかし、現実を非現実の方に引き込もうという程の強引さをもっていった。俺の事を見ているだけでなくさっさと俺を助ける!といわんばかりに読者(他者=現実)である少年を自分の非現実の世界の方に引き摺り込んだ。そして、めんどりたちと一緒にってめんどりおじさんを讃える唄まで歌わせるのである。この楽譜はその通りうたっても演奏できない。筆者も試してみたが演奏できなかった。まるでこれは“とにかくなんでもいいから俺を認めてくれ!愛してくれ!”というナルシステックな叫びのようである。そのくせ、めんどりおじさん自身は、これが非現実であることを知っているときは、身勝手なナルシズムに陥っているとしか言えないのではなからうか?(8)

その後で、めんどりおじさんの知性化された頭の中を覗いてくれと、我々は強要されることになる。めんどりおじさんの、自分を愛してくれ、認めてくれという叫びは痛い程理解できるにしても、これでは真に他者と通じ合うことはできないだろう。めんどりおじさんは、まさに、自分の頭の中を覗いてもらう(知性化する)ことによって他者と通じようとしたのである。

このように願望が先行しているという意味で、S・Aの作品はファンタステックではあっても、作品としての完成には程遠いと思われる。

この作品を読んだ人々の中に多く聞かれた感想は「説明され過ぎていて、自分の想像を入れる余地がない」というものだったということである。確かにこのナルシステックな作品は面白い面も持ってはいるが、人々になにか強引に引き摺り回されるようなナルシステックな世界を感じさせることは確かである。S・A自身としては、誰も自分を分かって(愛して)くれないと思っているようであるが、他者にしてみれば、分かってあげたくても何処かでそれを拒否されているように感じてしまうものがあるのではなからうか?

以上、多少羅列的ではあるが、S・Aの作品を要約するという形を借りて8つの問題点を抽出した。それぞれに標題をつけると次のようになるだろう。

(1)“卵を生みたい”という強迫観念について

(2)この強迫観念をもつことによって得られる疾病利得について

(3)“ヒトが悪魔になる”という対人恐怖について

(4)“頭の中を図式化する”という知性化について

(5)“りんご”への退行について

(6)“りんごが卵になる”という非現実への逃避について

(7)“めんどり”としての女性のもつアンビバレンスについて

(8)“めんどりおじさんの唄”をうたわせるというナルシズムについて

以下この8項目について、実際の分析場面であらわれた自由連想をもとにして考察を加えてみたいと思う。

V. 作品に表われているいくつかの問題点の自由連想内容（治療場面）からの考察

筆者はS・Aに対してコーチ（寝椅子）を使った精神分析を行った。1週間に1回、各セッション1時間づつを使い、現在まで約2年間の間分析を続けている。S・Aは病気と急用で3回程休んだ以外はほとんど遅刻することもなくきちんと分析に通い続けている。S・Aは分析を受けようと決心した途端、やっと念願が叶ったという嬉しい気持ちと、自分の欠点を見破られてしまうのではないかという強い不安を感じたという。分析者が入り口まで迎えてくれ、また玄関まで見送ってくれることを、自分が充分受け入れられているようで、何かたまらなく嬉しかったとのべた。S・Aの分析はスムーズに進んだ。児童文学を専攻しているためか、イメージが非常に豊かであり、ほとんど澁みなく様々な連想を語り続けた。文学に関連して、S・Aは分析を受けたらもう作品がかけなくなるのではないかという疑いをもっているとのべた。しかし、S・Aは木田⁽⁶⁾の著書の中から古沢平作の「分析をやって、精神状態が良くなってだめになるような才能なら、そんな芸術はやらなくなったっていいのです。本当の才能は分析でますます伸びるものです」というコトバを引用し、自分なりに納得したという。筆者が思うには、我々を駆り立てている欲望の源泉を知ったとて、我々はまさに欲望することによって生きているわけなのだから欲望そのものが消えてしまうことはない。ただ欲望の向けられる方向が変わってしまうだけなのではないか？さらに言うなら、フロイト⁽⁷⁾は「終りある分析と終りなき分析」の中で、分析が無限の課題であるとのべているが、けだし、一人の人間を分析しつくせるものではないと思う。S・A自身はまだそのことに充分気づいてはいないように思われるが、筆者としてはこのフロイトの言葉を送ってあげたい気がする。

以下、IVで抽出した主題について、治療場面であられた情報を絡ませながら考察してみたいと思う。

(1)「卵を生みたい」という強迫観念について

めんどりおじさんは男性であり、男性が子ども

を生むということは不可能である。めんどりおじさんは、この「不可能」に向けて努力しているというところに、めんどりおじさんの強迫観念の特徴がある。

S・Aは自由連想の中で、「母が自分にやさしかったのは病気のあとだけだった」とのべたことがある。「しかもそれは、もうダメだと思える程の大病でなければならなかった」というのである。つまり、不可能の後に幸福がやって来たのだった。S・Aは「自分は危機的場面に強い、それが絶体絶命のピンチであればある程、自分はそれをのりこえられるという確信がある」というのである。また、S・Aは「アナーキーなデモの場面や、台風のあとの混乱の中で何故か人々は優しくなり連帯しているように思える」と語ったことがあった。これは、めんどりおじさんのストーリーに似ていないであろうか？卵はどうしても男には生めないことが分かった絶体絶命のその後で、めんどりおじさんは皆に優しくされるのである。

S・Aは記憶しているだけでも、2度死ぬ程の体験をしている。(1)祖母に空乳を吸わされて窒息しかけた時、(2)髄膜炎を疑われもう死ぬのではないかと周囲の人が心配した時。そして、(2)については病気のあと、厳しい母が限りなく優しくなったということ思い出した。(1)の時も恐らく、S・Aをあまり構ってやれなかった母が優しくなったであろうことは想像にかたくない。この2つの事件はいずれも6才以前のものであり、S・Aに決定的な人生観を植えつけたのだろう。

この後、S・Aは物事をわざと不可能な側面からだけ見ていくという非現実的な態度を身につけていくが、それはS・Aにとって、それが不可能なこと（絶体絶命のこと）でなければ他者（母がその最初の人である）から認められない（愛されない）という強迫観念が無意識のうちに存在していたからに他ならない。

S・Aはこの強迫観念の意味を意識化していなかった。それ故にまた、めんどりおじさんの「たまごを生みたい」という不可能な強迫観念もその意味を明らかにしえないのである。

(2)この強迫観念をもつことによって得られる疾病利得について

強迫観念はそれをもつこと自体苦しいものである。人が快を求める存在であるのなら、何故わざわざ苦しさが選ばれているのか？そこには何らかの利益があるのだろうか？フロイトの神経症論はそもそも、疾病が満足をもたらす故に、患者は発病し、疾病を持続させるというものであった⁽⁸⁾。それでは、S・Aのもっていた「不可能な事でなければ本当の事ではないような気がする」という観念、そしてめんどりおじさんのもっていた「卵を生みたい」という観念の疾病利得はどこにあったのだろうか？それは、S・A自身語ったように、不可能（絶体絶命）の後に母の優しさがえられるということにあったことは、既に(1)のところで示唆しておいた。けだし、めんどりおじさんも不可能への努力のあとで他者の愛をうけることができたのである。

ところで、S・Aが無意識のうちに持っていたこの観念は、何故今日までの人生で気づかれることがなかったのだろうかという重大な問題がひとつある。その理由として、筆者は3つの原因があげられると思う。(1)ひとつは、この観念自体が決して日の目を見ない、白日のもとに曝けだされない構造になっているということである。S・Aが不可能だと思っていたことが可能になったとする。そうすると、既にそれは本当の事ではないと感じられる。S・Aはさらに不可能な事を見つける。それが可能になる。これも本当の事ではない。つまり、不可能な事と思っていたが実は可能な事であったという現実的基準で検討されることなく、不可能な事だけがさらに追求されていくのである。不可能な事は最後には“不可能”という観念、決して試されえない領域まで突き進み固定化されていくのである。(2)もうひとつの原因として、この観念があったお影で、S・Aが常に克己心を忘れなかった。そのために、出来なかったものも、出来るようになっていったという現実的側面を見逃すことはできない。この観念は現実的に非常に役立ち、S・A自身に利益をもたらしたのである。(3)さらに、この不可能への挑戦という努力が、S・Aの一家に潜伏していた家族神話「我々は落ちぶれた一族であるが、もとを正せば士族であり、世が世であればこんなみじめな生活をしているはずがない」という神話に一致していたということである。S・A

の努力は、落ちぶれた一家を救う家族願望としっかり手を握り合うことができたのである。

この3側面(1)観念の検証不可能性、(2)現実的利益をもたらしたこと、(3)家族の潜在的賞讃をえやすいものであったことによって、S・Aの強迫観念は根強く成長し続けたのだと思われる。

(3)“ヒトが悪魔になる”という対人恐怖について

佐藤⁽⁹⁾はすべての神経症の根底に対人恐怖があるとしているが、S・Aにおいても“対人恐怖”がその中核をなしていた。ただ、S・Aにおいてこれは充分意識されていなかった。めんどりおじさんにおいても、確かに頭の中では人が悪魔になってはいるものの、現実的なヒトは、めんどりおじさんを許してくれたし、救ってあげようとさえしているのである。

それなら、何故この恐怖は意識化されなかったのだろうか？S・Aは「昔、怖かった母も今では年老いてしまい、可愛想な気さえする」とのべた。このように現実的対象はもはや恐怖の対象ではなくなっている。このことがその第一の理由としてあげられるだろう。しかし、S・Aの思い出の中に残っている「恐ろしい母」は、母以外の他者に移し変えられ、S・Aの根強い対人恐怖を形成している。S・Aはいつか「母は私がか心の中では母を恐れ、嫌い、見かけ上従っていただけなのを見透していたような気がする」とのべたことがある。つまり、この時点で、母に直面すると、母を恐れ嫌っている内面を見透されている以上、その内面さえも歪曲しなければならなかったのではないかと思われる。(ぼくは母を嫌ってはいないのだ！と)

さらにつけ加えなければならないことは、母が常に怖かった訳ではないということである。S・Aは強迫観念的にはあれ、「不可能（絶体絶命）のあとは母が優しくなる」という感情も身につけていた。この点からすれば、恐ろしい母は悪魔にすぎず、優しい母のみが本当の母なのだという方法、つまり、ヒトはたまたま悪魔にすぎないのであって、本当は優しいのだという方法によって、S・Aがこの対人恐怖をのりこえてきたということも、対人恐怖を意識化させにくくしている原因になっているのではなからうか？

最後に、分析を離れていうなら、人は誰でも他

人に愛されたいという根強い願望をもっている。この願望もまた、対人恐怖を意識化させにくくしている原因ではないかと思う。原因という以上に、このような願望があってこそ、人は発狂をまぬがれ、生き続けられるのだろう。

(4)「頭の中を図式化する」という知性化について
アンナ・フロイト⁽⁹⁾は、知性化を自我の防衛機制のひとつとして扱っている。S・Aの防衛機制のひとつとして知性化を挙げることができる。頭の中を絵にして見せるというこの方法をS・Aは前作品をかく過程で見つけたのだという。それは猫がりんごにのって空を飛ぶという作品であった。「頭の中がこんがらがって何がなんだか分からなくなるよ」という部分を「りんごが、ごちゃごちゃに頭の中をとんだ」と表現することで、読み手にもイメージしやすいのではないかと考えたという。

これに関連して、S・Aは大学時代に属していた児童文学サークルの事を連想した。S・Aが4年の時、新入生の女の子から、「S・A抑圧体制粹粋」と連絡ノートにかきつけられてしまったというのである。S・Aとしては他人を抑圧している気はなく、ただ自分の信念にひたすら従って生きてきただけだったので、この言葉が不可解で仕方がなかったという。

筆者も、一回読み切り講演のようなS・Aの連想が面白くてたまらないのだが、何かそこに引き回されているような不思議な疲れと寂しさを感じていた頃なので、さっそくそのことをテーマに取り挙げ話し合ってみた。例えば主人が犬に散歩をさせている。犬はよく言うことをきく、しかし、結局は犬に引き回されているようなそんな気持ちを治療者もったのであった。これに答えて、S・Aは「ぼくの話は皆が面白いと思うにちがいないという確信がある。結局先生もぼくの話面白がっている。ぼくは世界中の人にぼくの話をかきさせてやる」という途方もない万能感を露わにしたのであった。S・A抑圧体制粹粋といった子はその押しつけがましい面を見てとったのかも知れない。S・Aの知性化の裏にはこのような万能感も隠されていた。

さて、S・Aは自分自身「ヒトを本当に好きになると、その人の事が知りたくてたまらなくなるが、

実際に会うのが怖いので、手紙でしか自分の気持ちを打ち明けることができない」とのべ、相手に惹かれる気持ちと、近づいたら呑み込まれてしまう恐怖があることを話してくれた。「自分は相手との間に媒介物を置き、適度な距離をとらないと付き会っていけない」とものべた。また、自分は昔から秘かに心理学に興味を持っており、人間の間に起こっていることを理屈で理解してホッとすることが、実際の人間関係ではいつもオロオロしてしまうということであった。S・Aは自分の中にそのような感情の動きがあることを、中原中也⁽¹⁰⁾の「…私は弱いので、悲しみに出会ふごとに自分が支へきれずに、生活を言葉に換へてしまいます」という詩や、宮沢賢治⁽¹¹⁾の「…あんまりひどい現実なのだ 感ずることのあまりに新鮮すぎるとき それをがいねん化することは きちがいにならないための 生物体の一つの自衛作用だ…」などの詩を通じて気づいてはいたようである。しかし、その知性化が分析者との間にどのような形で出現するかはまだ経験しておらず、したがって、知性化によって何をえているか、そのために失っているものは何か？それが、他者にどのように感じられているかというところまでは理解されていなかったのである。

『めんどりおじさん』に対しては、「あまりに説明されすぎていて面白くない」という評が多かったということについては先に触れた。この意見から推察する限り、自分の考えていることが、皆に充分伝わるようにという意図は返って裏目にでてしまったようである。そして、先にふれた、「自分の話は誰もが面白いと思うにちがいない」という、S・Aのナルシステックな自信、これだけが、人々の方に伝わってしまったものと思われる。

ところで、S・Aはもともと押し入れっ子であり、モヤシのように身体が弱かったという。これが後の日射病の原因にもなる訳であるが、このため、早くから本が好きになった。これは母譲りのものであり、寝る前よく母が本を読んでくれたという。このような背景をもって、S・Aの本好き→知識への欲求が形成されていった。他の物は買ってもらえなくても本だけは買ってもらえたという。本はまさに、S・Aが自分を支え、また他人に褒められる場として機能していた事を忘れてはならない。

さらに、とりわけS・Aが衝動的に好きだったという宮沢賢治の世界は、「不可能を実現してくれる世界」という意味でまさに、秘かに、強迫的なS・Aの願望を充足させてくれる世界であったと思われる。

以上の事を背景にして、頭の中を図式化し、整理分類するというめんどりおじさんの世界も理解しやすいものになる。知性化はS・Aにとって、(1)自分の万能感を満足させえる場所であり、(2)それを通じて他者の愛をえられる場所として機能していたのである。このような利得なしに、知性化という防衛機制を考えることはできない。フロイトは、人間の本能を自己保存の本能（自我本能）と種族保存の本能（性本能）の2つに大別して考えていたが、その後これを自己愛と対象愛という対立する性衝動としてとらえなおした。^{(12)注*} ヒトは知性化という防衛機制を使って、まさに、この2つの側面を満足させようとしているのだと考えられる。

(5)「りんご」への退行について

フロイト⁽⁶⁾によれば「りんご」が乳房を象徴しているということについてはIVのところでも触れた。

そもそも、S・Aの分析において、「りんご」はその初めから非常に象徴的であった。S・Aは初回分析場面において、まず「青いりんご」を思い浮かべたのであった。そして、それに続いて、本稿で論じている作品を語ってくれたのであった。また、S・Aが、その作品の前にかいた作品には「魔女」が登場し、前々作には「とぶりんご」が出てくるのだという。『めんどりおじさん』はまさにこの「りんご」と「魔女」がミックスされたような作品である。

S・Aは分析のかなり初期の頃にひとつの夢を見た。その夢とは次のようなものであった。「むこうのソファに女性イメージの分析者が座っている。ぼくは甘えて膝枕をして欲しいのだができない。そこで少し離れたところにあるソファに寝そべて、ラジオ・カセット・テープのチューナーをしゃぶっている。」

これは恐らく分析者への転移を表した夢であると思うが、同時にまた、S・Aの母子関係、女性との関係などを象徴的に示していると考えてよいと

思う。S・A自身、「ぼくは女の人に甘えたいんだけど、知的なもの（ラテカセのチューナー）を通して、一定の距離をとらなければそれができないんだ」とのべている。

S・Aと同様、めんどりおじさんも頭の中で、「りんご」という口唇愛的段階に固着しているようである。めんどりおじさんの努力はまさにこのような固着したリビドーをなんとか軌道修正しようという試みなのだと思う。

ところで、筆者は思うのだが、S・Aが、「りんご」で象徴される口唇愛的段階への退行過程においてさえも、大学で聴講したという分析的手段（治療的退行が神経症治療の第一歩であるという知識）をつかかってしまっている。ここに於いてさえも知性化という防衛手段を使ってしまっているということに、ある種の銘状しがたい感動をうけたのである。しかもこの知性化はある側面からは大変面白いものであり、人々を充分に楽しませる面も持っているのだと思う。このことに気づいた時、S・Aは「自分は太鼓持ちみたいだ」といった。知性化はS・A自身の言葉で「太鼓持ち」といった方がより適確であろう。この「太鼓持ち」という言葉があらわす防衛機制の一側面に、治療者は深く感じ入ってしまったのである。S・Aは太鼓持ちをすることによって、人々を楽しませなければ、自分が受け入れられないと思い込んでいる。その太鼓持ち的態度で、S・Aは自分自身を治療し、変えようと一人で頑張ってきたのであった。

我々は、防衛機制という言葉を目頃何気なく使ってしまう。しかし、S・Aがたった一人と思いついて生きてきたこと、この防衛機制を使わなければ生きてこれなかったということ、どんなに深く考えても考え過ぎということはないであろう。人はそこに傷があるからこそ、バンド・エイドを貼るのであり、傷を他の手段で癒してあげない限り、バンド・エイドを取り除いてしまうことは残酷なことである。また他にも薬があるのだという信頼が分析者との間に確立されない限り、被分析者は自らのバンド・エイド（防衛機制）を認めることはないだろう。

ここにこそ、また、分析は2人で行なうものであり、一人でやる自己分析にはおのずと限界がある⁽¹³⁾という見解の治療論的根拠もあるのだと思

われる。S・Aはこの試みを一人でやってきたが、ついに精根つきはてて治療者を訪れたのであろう。それが、分析のかなり初期の段階ですすでに退行がおり、治療者への転移が起ったということの理由であると考えられる。

(6)「りんごが卵になる」という非現実への逃避について

荒保宏⁽¹⁴⁾は『指輪物語』にふれて、次のように述べている。

……現代にあって、夢の物語やロマンスや、あるいは『指輪物語』のような幻想譚などは一括して〈ファンタジー〉と呼ばれ、現実世界に適應できない心と体の弱い人たちが読む「逃避のための文学」だと批判されてきました。(中略) トールキンは主張します。「何の罪もないのに突然牢獄に入れられた人がそこから逃げだそうとしても非難されるいわれがないのと同じように、何の罪もないのに〈現代〉という名の牢獄に閉じこめられた現代人が、その苦しさを忘れるために一時楽しい夢にひたつたからといって、それがどうして悪いことなのだ」……

この論の当否は別にして、児童文学の中にあってもファンタジーを逃避だと決めつける見方が存在しているように思われる。

筆者もこの章の表題に逃避という語を用いた。しかし、筆者が強調したいことは、りんごの木の上でリングを卵と思い込んだことについて、めんどりおじさんは、自分の妄想が妄想であることを知っていたという事実である。この意味で、現実には完全には否認されていない。確かに分析場面においても、S・Aは自分の無意識に出会うとそれを再抑圧しないという態度をとった(しかしこれはとっているかのように振舞っているだけだった)。例えば、治療の初めに、入り口でS・Aはいつも何か治療者に語りかけるのを常としていた。分析者はこれを止めるよう提案した。しかし、S・Aはこの提案を忘れたわけでもないのに、あいかわらず、この振舞いを止めなかった。つまり、S・Aにあっては超自我の禁止は、一応心的次元では受け入れられるのだが、行動の次元では抑圧しているわけでもないのに、それを止めないというように、心的次元と行動の次元が分裂していたといえる。

筆者はしたがって、りんごを卵と思い込んだことが逃避だということよりも、それを空想だと知っていながら、なおも空想に留ってしまうとい

うS・Aの態度をこそ指摘したいと思う。それは、いいかえるなら「俺は分かっているんだ。醒めているんだ」といいながらもその行動を止めないこととであり、「分かっちゃいるけど止められない」という態度である。つまり、S・Aは超自我を完全に受け入れ、それに従っているように見えて、実は自分の欲求を朽妙なやり口で貫ぬき通しているのではないかと思われる。

めんどりおじさんも、この朽妙なやり口を取っている。皆をあれ程心配させていながら、めんどりおじさんはなんと「ぼくは実はこの卵がリングに過ぎないと知っていたのさ」といっているのである。心配した人たちこそいつらの皮である。なぜ皆怒らないのだろうか？めんどりおじさんに騙されてはいけないと筆者いいたい。筆者はファンタジー好きのS・Aに対しては何も批判できないが、めんどりおじさんの態度にはやや批判的である。

(7)「めんどり」としての女性もつアンビバレンスについて

男が卵(子ども)を生むという発想はそれほど奇妙なものではない。稲垣足穂⁽¹⁵⁾の『少年愛の美学』や、植島⁽¹⁶⁾の『男が女になる病気』にもそのことへの言及が見られる。稲垣はこれを肛門愛(A感覚)という側面から、また植島は通過儀礼という側面からそれぞれとらえている。筆者としては、めんどりおじさんの願望を、(1)超自我への服従から自由になりたいという、肛門期への固着と自律への希求、そして、(2)通過儀礼という社会的儀式を通じて一人前のおんどりになりたいという自立への希求という2側面からとらえたいと思う。この自立を妨げているものは一体何なのだろう。

それは(1)でものべたように、母に対するアンビバレンツな態度による。めんどりは(1)いじわるな女と、(2)めんどりおじさんに付き従ってくれる女という全く相反する特性を持ってめんどりおじさんの前に現れてくる。S・Aもまた、女性に対していつもこの相反する2側面を感じるとのべた。このような特性を最も持ち易いのは母のような勝気な女性である。S・Aはそのような女性に会うと理想化し、その理想に合うように服従し、その見返りとして自分を完全に愛して欲しいと願うという

ことだった。しかし、この時点で、S・Aは自分の理想に恋をしているのであって、現実的にその理想を負わされた生身の女性こそいい迷惑であろう。彼女は当然S・Aから離れていく。その離れていく姿をみて、S・Aはまたぞろ「不可能こそ真実である」と感じ、安心するとともに、自分にその不可能を味わわせる女性を理想として奉ることができるとことが分ってきた。

『めんどりおじさん』をかいたのはこのような自分のパターンに気づき始めた頃であったという。その意味で、「卵を生みたい」という願いは、アンビバレンツな女性への態度から自由になりたい、自立したいという無意識の希求だったのである。しかし、それが、自分一人の力で対象たる子どもを生むという地平に留まっているところに、S・Aの一種独特のナルシズムが現れているように思う。対象としての女性に対してアンビバレンツな態度を無意識にもっているということ意識化して、それを克服することによって初めて、めんどりおじさんは自立できるのではなかろうか？めんどりおじさんは、めんどりに卵を生んでもらえばいいのである。めんどりおじさんは現実の女性に心から甘えることが必要なだけである。そのような甘えを許してくれるのは「菩薩」のような女性だけであるかも知れない。その意味で、治療者はこの「菩薩」のような役割も負わされているのであろうか？

(B)「めんどりおじさんの唄」をうたわせるというナルシズムについて

ナルシズムについて、ラブランシュら⁽⁶⁾は「ナルシス神話にもとづき、自己自身の像に対する愛をいう」という簡潔な定義を与えている。S・Aの根底に横たわっていた対人恐怖は、S・A自身の、母親像に対するアンビバレンツな態度より結果した、リビドーの、対象から自己への撤退であった。めんどりおじさんが、皆に自分の願望をうたわせる場面は、まさに、「なんでもいいからこんなに頑張っている俺を認めてくれ、愛してくれ！」という願望の、唄を通しての表現である。めんどりおじさんは、とにかくこの自己への讃歌を掲げ所にして、幸に眠ってしまうのである。めんどりおじさんの頭の中には、めんどりおじさんの願望その

ものであった口唇願望を象徴する「りんご」が一杯である。のんびりと、満ち足りて眠っている姿は、水面に映った自らの姿に恋をしておぼれ死んでしまったナルシスの姿を彷彿とさせるものがある。

しかし、めんどりおじさんは本当に満ち足りた存在になったのであろうか？作品自身もノンと答えているように思われる。「りんご」は青いリンゴなのだという。それはいわば未成熟の象徴のようにすら思われてならない。めんどりおじさんはまだ、幼な児のように眠ったままである。

ところで、S・Aは分析中、治療者が、S・Aの話を楽しみ、それが面白いと話し、それはS・Aが他人に対して「太鼓持ち」的に接しているからだとして解釈しても、何ら深刻に受けとめている様子はなかった。まさに自分の目的は達成されたといわんばかりにエヘラヘラと喜ぶばかりだった。分析者が、「S・Aの態度は例えばあなたは東大出だから頭がおよろしいと皮肉られて、一ハア、ワタシは東大出ですからと喜こんでいるようなものだ」と説明しても、何かピンとこない様子であった。

佐藤⁽⁷⁾は、**性格抵抗**の中心要素には「万能感的確信」が存在するとし、分析の中でこの抵抗が出現する時期を「自己愛的万能感出現」の時期であるとしている。S・Aに関していうならば、S・Aは分析者との関係の中で、他者としての分析者から「太鼓持ち的態度」の意味を指摘されても、いっこうに気にするどころか、喜こんでさえいる。このような空回りの構造があるからこそ、また、S・Aの「太鼓持ち的態度」は性格として形成され、ライヒ⁽¹⁸⁾が「性格の鎧」と呼ぶほど強固なものになりえたのであろう。S・Aが母の前で酔っぱらいの真似(芸)をすると皆大喜びであったということ、S・Aは回想した。それが、母からの恐怖に対するS・Aの性格抵抗を形づくる由来であったということ、S・Aは抑圧していたのである。

めんどりおじさんにしても、卵を生みたいという強迫観念がもともとは人(=超自我)に対する防衛に発していることを忘れ、実際には愛をえていないにも拘らず、人々に愛されたという幻想の中にナルシステックに満足し、眠り込んでしまったのであった。

VI. 残された問題についての考察

筆者は I のはじめにで本論の目的を3つ挙げておいた。(1)のS・Aの心理的構造がどれくらい作品に反映されているかという点についてはVでおお方解明されたと思うが、(2)と(3)の問題についてはほとんど触れられていない。これについて以下若干の考察を行いたいと思う。

(2)作家であるという目的意識をもたずに即自的・衝動的にかかれた作品になぜ無意識が反映されやすいか？

(3)無意識にかかれた作品が目的意識的にかかれるようになるというのはどんなことなのか？

これまで、『めんどりおじさん』を検討する中で、筆者は、S・Aと母の関係を中心に考察を加えてきた。それはS・Aの幼児期の外傷体験が彼の現在の行動をどのように規定しているかの発見にも繋がっている。しかし、S・Aの幼児期の環境は母子関係のみによって作られていたわけではない。筆者はここで、S・Aの父方の祖父と祖母、母方の祖父と祖母、そしてS・A自身の父母3組の夫婦に、共通のパターンを見いだした。それは勝ち気で支配的な妻と、優しくお人好の夫というパターンである。この繰り返しには運命的なものささ感じられ何か空恐ろしい気持ちになる。我々は歴史の繰り返しの中にただ手をこまねいて傍観するよりないのであろうか？我々が無意識の内に留る限りそうである。しかし、そのパターンに自ら気づいた時、我々はまたこのパターンを対象化し、自らの手の平の上において眺める自由をえている。自らの歴史を再構成することによって、我々は過去を支配しようとしていることになる。

エリクソン⁽¹⁹⁾は、フロイトの「糸車をベッドの向うに投げ、みえなくしては引き寄せるゲームをする幼児」の例をひいて、次のようにのべている。……(フロイトは)子どもの一人遊びに気づき、その主なテーマ(何かものが、或は誰か人が消え、そしてまた戻ってくる)の出現する頻度は、そこに反映される生活経験、一すなわち母親が午前中に外出して夜遅く帰宅することの厳しさと符合する事実気づいたのである。

このような戯化が遊びの領域で行われるのである。ここでは、事物を思い通りに支配できることを利用して、子どもは現実の生活の苦境においても同様に自分が支配者であると想像できるように、これら事物を配置することができ

るのである。なぜならば、母親が彼を置いて出かけたとき、彼女は、彼が泣いたりいろいろ要求したりできる世界から立ち去ったのである。そしてたまたま彼女の都合のよい時間に帰ってきたのであった。しかしゲームでは彼は母親を紐で操るのである。彼は母親を立ち去らせる。投捨てることさえできる。そして、自分の思いのままに彼女を帰ってこさせるのである。(中略)子どもは受動的立場を能動的立場に変えたのである。(傍点引用者)……

ここには、遊びというマイクロコスモスをつくることによって、世界を能動的に支配していく幼児の姿が描かれている。この姿は、また、無意識を再構成することによって、自由を得ようとする我々の姿にも似ている。

エリクソン⁽¹⁹⁾は子どもの「遊び」を「ある事態の雛型を創造することによって経験を処理し、また実験し計画することによって現実を支配するという人間の能力の幼児的表現形式である」としている。

ここで「遊び」を「作品を書くこと」と置きかえてみれば、先にだした、(2)(3)の問いの答えが導かれる。つまり、作品を書くという行為は、それ自体、自らの無意識を対象化し、「雛型」をつくるという行為なのである。したがって、そこに無意識が反映されるのは当然である。さらに、即自的・衝動的に突き動かされてかかれた作品の方がより無意識の深い層を抉りとることになると考えられる。(3)については、我々が作品に向けるイマジネーションが、単に個人史(個人的世界観)の主観的吐露に終ることなく、その個人史的・歴史的背景にまで向けられるようになることを意味しているように思う。つまり、目的意識的に作品をかくということは、主観的、個人史的な(私の…)という世界を越えて、客観的、歴史的(私たちの…)という世界へイマジネーションが飛翔していくことなのだ。ところで、我々がいくら事実を客観的にみようとしてもそこに主観が入らざるを得ない。それ故に我々は夢み、イマジネーションをふくらませるのである。事物を客観的にみるということは、事物に別様の光を当てるということであり、イマジネーションをちっぽけなものにしない努力なのだと筆者は思う。

S・Aの症例にこの光を当ててみると、どうなるだろう？S・Aの父方の祖父は職人気質の大工であ

り、そこへ明治維新で没落した士族の娘として、S・Aの祖母が嫁いだ。この人の気位の高さが嫌で、祖父は家を出て、他の女のもとに走った。それ故、S・Aの父は幼い時から苦勞に苦勞を重ねねばならなかったという。小学生の身で4里の道を歩いて祖父のところへ金をもらいにいったという。S・Aの父も若い頃は遊び人であったが、子どもが生まれてピタリと道楽を止めた。若い頃短気であった父が怒らなくなったのも、家に不和を起ささないという、子どもへの父なりの思いの表現であった。S・Aは父が、母に対して逃げ腰だと批判した時期もあったが、その態度故に、家庭を崩壊から救った面もある。それが父の自分たちに対する愛情だったのだと気づいたのだという。父は「仏様」と呼ばれていたというが、まさに「自分たち」に対して「仏様」だったのだとS・Aは述懐した。この時点で、S・Aは自分の過去の出来事を、父の個人史というより大きな世界を絡めて再構成することによって、自らの個人史を支配したのだといえよう。さらにそれは、江戸時代から明治時代へ移ろうとする日本の歴史が引き受けた激変を、男と女（S・Aの祖父と祖母）の出会いという形で具体化した民族史でもあった。（S・Aの祖父と祖母の出会いはまさに、武士の没落という近世の没落がなければありえなかった。）

最後に、本稿を終えるにあたっていっておきたいのは、筆者はS・Aの分析を行いつつ、それが決して他人事とは思えなかったということである。フロム⁽²⁰⁾は次のようにのべて、他者の分析が結局は自己分析に他ならないことを喝破した。

……私は私自身のうちに（ユダヤ人虐殺の）アイヒマンを見いだします。（中略）分析されることは、私にとっては、私のうちなるあらゆる非合理性に対して私自身を開かれたものにするということを意味しています。そのときにのみ、私は私の患者を理解することができるのです。……

フロムがユダヤ人であるということ考慮するならば、これはまさに、彼が民族という枠を突き抜けて人類という基盤に進みえたという輝かしい独白であろう。筆者もまた、あらゆるものから自由になるために、心をいつも開かれたものにしておきたいと思う。

要約

S・Aという、対人恐怖を根底にもつ26才の男性がかいた『にわとりむらのめんどりおじさん』と題された作品を、実際の精神分析場面から得られた情報をもとにして分析した。作品中の主人公は、S・A自身の実際の心理的構造を驚くほど正確に反映させていた。作品の主人公もまたS・Aと同じ防衛機制をもち、同様の心理構造をもっていたのである。しかし、作品は決して分析されるためのものではなく、作品そのものとして扱わなければならないという立場から、我々は作家が作品をかくのは、その人が意識するしないに拘らず、自己を対象化する作業であり、世界を我がものにしたという人間本来の欲求^{***} なのだとすることを明らかにした。それはまた他者（対象）を欲求するという人間の本質の営みに裏打ちされているのではないかと思われる。

引用文献

- (1) フロイト, S. (高橋義孝・池田紘一訳) ドフトエフスキーと父親殺し フロイト選集7 芸術論 日本教文社 1970
- (2) フロイト, S. (高橋義孝・池田紘一訳) レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期のある思い出 フロイト選集7 芸術論 日本教文社 1970
- (3) 佐藤紀子 無意識への挑戦 河野心理教育研究所出版部 1974
- (4) 北見芳雄・佐藤紀子 生活の中の精神分析 誠信書房 1964
- (5) フロイト, S. (高橋義孝・下坂幸三訳) 精神分析入門(上) 新潮社 1977
- (6) 木田恵子 子どもの心をどうひらくか 太陽出版 1979
- (7) フロイト, S. (小此木啓吾訳) 終りある分析と終りなき分析 フロイト選集15 精神分析療法 日本教文社 1969
- (8) ラプランシュ他(村上仁監訳) 精神分析用語辞典 みすず書房 1977
- (9) フロイト, A. (外林大作訳) 自我と防衛 誠信書房 1958
- (10) 中原中也 寒い夜の自我像 中原中也詩集 角川書店 1968
- (11) 宮沢賢治 青森挽歌 宮沢賢治詩集 旺文社 1969
- (12) 井村恒郎 フロイト選集4 自我論あとがき 日本教文社 1969
- (13) 佐藤紀子 精神分析における自己治療的方法について

て 催眠シンポジウムⅢ 自己制御・自己治療 誠信書房 1971

- (14) 荒保宏 ファンタジイの時代 【指輪物語】パンフレット 東宝株式会社事業部 1979
- (15) 稲垣足穂 少年愛の美学 角川書店 1973
- (16) 植島啓司 男が女になる病気 朝日出版社 1980
- (17) 佐藤紀子 性格分析技法の追試と検討 精神分析研究 vol. 8, 9-51, 1961
- (18) ライヒ, W. (小此木啓吾訳) 性格分析 岩崎書店 1964
- (19) エリクソン, E. H. (仁科弥生訳) 幼児期と社会 1 みすず書房 1977
- (20) エバンズ, R. I. (牧康夫訳) フロムとの対話 みすず書房 1970

注* この後、生の本能と死の本能の対立という形而上学につきすすんでいくのであるがここでは略した。

注** instinct to master (White, R. W. Motivation reconsidered : The concept of competence. Psychological Review, 1959, 66, 297-333)

用語解説

(本文中太字でしめした語について解説した)

1. 投影

抑圧された衝動や葛藤を外部に投影して、その対象に属するものであるかのように意識すること。主として自己の抑圧された傾向を認めることの不安からくる防衛機制で、投影されやすいものとしては、敵意、憎悪、攻撃、性的欲求、道徳的欠陥などがある。この機制が病的に用いられた典型と考えられる被害念慮や妄想(特定の人または周囲全体が自分をおとしめよう、自分に危害を加えようとしているという感じや病的確信)は、事実はむしろ自分自身が向けている強い競争心や攻撃欲の投影にもとづくものとみられるし、同じく色情念慮や妄想(特定の異性または周囲の全異性が自分に強い関心を向けている「ほれこんでいる」との感じや病的確信)には、自分自身の性的要求の投影が存在すると考えられる。投影は間接的にはわれわれの人生観、世界観などものの見方にも広く関係をもつと思われる。気分のよいときには見るものすべてが明るく受けとられるのに反して、気分の悪いときには、同じものが全く反対にも

受けとられることがある(すべて、ものは心のもちよう)のは、日常だれしも経験するところであろう。古来、宗教が、我欲を捨てることが心の平和、幸福のもとであると説くのはこのことに関係しよう。

2. アンビバレンス

ある本能がもつ両極性。1組の対立する願望の両方を充足させたいという欲求。とくに、愛と憎しみ、積極性と消極性、男らしさと女らしさ、マソヒズムとサディズムなどの両極性をいう。(邦語として<両価性>、<両面価値>など訳されているが、ふつうこのまま用いられている)

3. 超自我

人格構造に関する後期の概念で、最初に外的欲求不満や懲罰を与えた大人たちの禁止や理想を、精神内界において表象するようになった主として無意識的な人格構成要素の一つ。理論的には、罪悪感や精神的苦痛をおびやかしたり、強いたりする精神内界の機能の組織である。(心の中の道徳的、裁判的な座、自我に対してくべしべからず)の機能をもつ)

4. 疾病利得

疾病利得とは、一般に、患者が直接的あるいは間接的に疾病から引き出すあらゆる満足のことをいう。症状のなかに見出される満足、疾病への逃避、周囲にたいする諸関係の有利な変化など、神経症の動機そのものにおいて考えられる利得である。

5. 知性化

本能的衝動にともなう自我の不安をもっぱら知性の働きによって観念的に処理しようとする機制で、衝動が強く発現するとともに、一方、知的発達がいちじるしい思春期には広くみられる働きである。この時期の青年は本能欲求と取り組んでこれを統御するだけの自我の強さを欠いているために、その葛藤を意識的に処理しようとする思想の問題に移して観念的に征服しようとするのである。したがってよくいわれる、青年が「勉強しすぎてノイローゼになった」というのは、むしろ逆に「神経症的な葛藤を処理するために知性化を用いたので、よく勉強するようになった」とみられるのである。

分析治療で患者が示す抵抗の一つとしての「知的抵抗」も、この機制にもとづく。この場合、患者は自己の抑圧している問題に触れられることの不安から無意識的に分析から逃避して、自己の問題から焦点を分析的興味や疑惑に移すのである。古来、宗教で人間の知的な探究や悩みを軽視するかにみられるのは、(禪では知的探究は「閑葛藤」「戯論」とされ、「莫妄想」とたたかれる)、この機制に注目しているものとみることでもできよう。

知性化は分析が知性の働きを消極的にのみ取りあげていることを意味しない。青年期の心的葛藤はむしろ自我の成長のための必須の契機とみられる。知性が本能防衛的にのみ使用されて、現実を離れた説明や終りなき論理のための論理探究に用いられる場合を知性化とよぶのである。

6. 退行

本能目標または対象を、正常な発達段階からみて、より早期に主要な意味をもった目標や対象に、無意識的に置きかえること。(幼児返り)

7. 象徴

願望や物体を、ある簡単な、詩的ニュアンスのある、非現実的代理物によって、精神的あるいは行動的に表象したもののすべて。とくに、一定の文化のもとにある個人には多く共通することが知られており、しばしば、夢、芸術、風習、日常生活に表象されているものをいう。

8. 否認

自我を不安におとし入れる本能衝動に関係をもつ現実の認識を否定すること。「心ここにあらざれば、見れども見えず、聞けども聞けず、味わえどもその味わいを知らず」に似た心理である。否認の機制は、自我の自覚的な統制下に用いられた場合は、自我の成長を助け現実への適応機制としての意味をもってくる。一般に不安や恐怖をひき起こす事態に対して「目をそむけ」たり、厳密にはその出現が必ずしも不可能とはいきれない杞憂に対して、そんなことは起こらないと「思い切ったり」して自我を保護する場合がこれに当る。これに対して否認が本能防衛として広く自我疎外的に広く行なわれるとなると、自我の適応障害をひき起こすことになる。

空想や白日夢にふける人間が次第に現実への興味を失なって適応困難をきたすなどはこれであるが、さらにこの機制が病的に働いた典型は精神病的妄想であろう。とくに誇大妄想や色情妄想の基礎には、現実の自己をそのまま認めることの否認が働いていると考えられる。

9. ナルシズム(自己愛)

- (1) 理論的には、個人の身体、自我、精神的態度などが、リビドーの対象となる結果、生じてくる現象をいう。リビドーの<内向性 introversion>。
- (2) リビドーの意識的、あるいは無意識的願望で、その充足のために、対象愛を必要としないもの。自己愛、あるいは、自己のある種の態度を愛すること。
- (3) 分析的精神病理学においては、自己愛が異常な形で、あるいは過度に現われることをいう。(いわゆる性的倒錯の一型としてのもの、自己の肉体への性的恋着)

10. 自由連想法

精神分析技法の基本的な原則。自然に意識に浮かんでくるすべての考えを、できるだけ理性や道徳的な批判を加えないで、分析者に報告する方法。観念の知的な連想とは対照的なもので、自然に心に浮かんでくる思いつきの過程である。(ふつう、患者は寝椅子に横になり、分析者はその頭の後ろの見えないところに坐って行なわせる)

11. 自我の防衛機制

快感原則に支配されるエスの欲求と、現実外界の規範や超自我の批判的抑制的働らきとの間の緊張関係を、その中間に立つ自我がどのようにに現実原則的に処理解決して人格内部の不安や不快の発生を防衛して、心の平衡を保つかということ。(それ故、自己防衛は自己中心的である—引用者)

12. 転移

精神分析や心理療法(その他の専門治療的關係)において、患者が治療者に対していただく意識的、無意識的空想のパターンで、患者の抑圧された欲求と人生早期の対象関係の結果として生じるもの。(幼児期から作られ、機械的、盲目的にくり返される無意識的、非現実的な対人

関係の型)

13. 口唇愛

口唇と口の快感に関連した意識的、無意識的願望、および、思考、行動、症状に現われるこれらの願望の派生物をいう。理論的には、性本能の構成要素のうち、口愛的快感を一次的目標とするもの。(口愛期において、お乳を吸う、とり入れる、のみこむ、しゃぶるなどの活動で見られる)

14. 固着

幼児的対象を求める無意識的願望、あるいはふつう発達の早期を支配している特殊な形の前性器的快感を求める無意識的願望が持続していること。(父固着、母固着、また、口愛期固着などともいう)

15. リビドー

心理的性本能とその精神的表象の本能的起源をいう。後期の理論では、〈エロス〉の派生物をいう。同義語：〈性的本能〉。(精神現象を力動的、量的に理解するために考えられた精神的エネルギーのこと。最初は性本能が重視されたので性衝動のエネルギーとしてリビドーが考えられた)

16. 肛門愛

肛門の快的な刺激に関連した意識的、あるいは無意識的な願望。さらには、それらの願望の、意識的思考、行為、症状、性格傾向などに現われた派生物に関連している意識的、あるいは無意識的願望をいう。理論的には、性本能の構成要素の中で、その主目的が肛門の快感であるものをいう。

17. 性格抵抗

ウィルヘルム・ライヒは、数多くの重要な論文において、ある患者が固定した性格特性を発展させることを論証した。それは過去の防衛過程の結果であり、また人格と精神分析過程の両者に特徴的な「固定した」態度として表れる。ライヒは、それらを「性格の鎧」(Charkterpanzerung)と呼んだ。彼はこのような「固定した」人格特徴による抵抗を、分析的作業の第1の焦点とすべきであると、主張した。

[出典は1・5・8が アンナ・フロイト(北見芳雄・佐藤紀子訳) 児童分析 誠信書房 1961, 2・3・6・7・9・10・12・13・14・15・16が I・ヘンドリック(前田重治・杉田峰康訳) フロイド心理学入門 岩崎学術出版 1978, 17がJ. サンドラーら(前田重治監訳) 患者と分析者 誠信書房 1980, 4が引用文献の(8) 11が引用文献の(4)である。]